

## 絵画教育における線描指導に関する一試案

桶田 洋明〔鹿児島大学教育学部(美術教育)〕・米倉 秀太郎〔鹿児島大学大学院教育学研究科〕

### A Study of Teaching Method Drawing in Painting Education

OKEDA Hiroaki・YONEKURA Hidetarou

キーワード：線描、クロッキー、美術教育、描画技法、絵画

#### I. はじめに

古来、絵画は線描によるものが中心であり、それは今日においても絵画を作り出す重要な造形要素のひとつになっている。魅力的な線は作品に命を与え、作者の表現意図を的確に訴えてくれる効果的な要素である。図工・美術教育においても線描表現は発達段階に応じて扱われている。しかし、年齢を重ねる度に描かれた線の魅力は低下して、それとともに作品そのものの魅力も落ちてきている傾向が見受けられる。それらの原因を探り、魅力的な線の定義を明確にして指導に生かすことによって、絵画制作の質の向上を果たすことができると考えられる。

そこでまず、絵画が持つ線の種類を検証し、魅力的な描線の概念を探っていく。その上で、特に、中学・高校における美術教育での線描指導の一助になるべく、短時間で効果的な指導ができるタイプの魅力的な線描表現について、授業実践も踏まえて考察していく。次章ではまず描線の定義や種類を含めて描線が絵画に及ぼす影響等についても考察していく。

#### II. 魅力的な描線とは

##### 1. 描線の分類

まず初めに、魅力的な描線とはどのようなものを指すのか、その定義について考察していきたい。最初に思い浮かぶ魅力的な描線は、クロッキーやスケッチにおいて見られる強く大胆に引かれた線である。しかし一方で、細く引かれ、決して強さを感じることでできない描線の中にも良いものはある。そこで、描線についての様々な解釈を西洋画、東洋画の歴史の別に検証してみる。

まず西洋画の作品においてだが、輪郭線は色彩

や光線の効果、面による造形の考え方の前段階に位置するものとされてきた。しかしレオナルド・ダ・ビンチやデューラー、また印象派以降の画家であるセザンヌ、ゴッホ、ピカソにおいても線を主体としたクロッキーやスケッチを作品制作の大切な骨子として数多く描いていた。さらには、戦後の作品の中でも描線を価値あるものとして積極的に取り入れたものは少なくない。

次に東洋画の作品においてであるが、東洋画は古来描線の美を尊重していた事もあり、線の勢いやリズム、さらにはその肥瘦、曲線・直線、長短、抑揚などが工夫されている<sup>(1)</sup>。それらは、現代の日本画においても描線における大切な造形要素とされている。また東洋画は「物象の根本的な形と線を探り、その生命や内容までもが簡潔に把握する<sup>(2)</sup>」といった要素を含んだ線を良い線としている。

ここまでは西洋と東洋における描線についての見解を記したが、次に描線を形作っている線の種類についてももう少し細かく検証していく。

描線は様々な種類の線が効果的に組み合わせられることで意をなし、魅力を出す。しかしその特性を配慮せずに適切に用いることをしなかった場合、そのような描線の組み合わせを用いたクロッキーやスケッチの魅力は半減してしまう。そのため以下には描線を構築する線のタイプを大きく四つに分けて示し、またその効果的な活用法についても触れていく。

一つ目は線の肥瘦である。描線には細いものと太いものがある。細い線は緊張した線とも言われ、スピード感のあるシャープな細い線は堅い表情を表すことができる。また細い線であっても、デリケートに描くことで安定感や重量感を感じさ

せることもできる。一方、太い線は柔らかさを持っている。太い線のうち、たるんだ、力を抜いた線はゆったりとした柔らかさを持っているが、勢いのある太い線は大きな動きを表すことができる<sup>(3)</sup>。

二つ目は曲線・直線である。曲線のみによる描写は弾力のある柔らかい表現ができ、また表情豊かで変化が大きい。一方で締まりのない表情を持った線になってしまうこともある。直線のみによる描写の方は力強さと立体感をもちますが、絵が固くなりすぎてしまうこともある。また、曲線と直線の両方を取り入れることで、ある程度の緊張感を維持しながらも静かな表情まで表現することができる<sup>(4)</sup>。

三つ目は線の長短である。ほぼひとつならに引かれた一本の長い描線は、線を引くことを支える息の長さが大切になってくる。それには対象をひとまとめに見るといふ要素が必要となるが、それは大雑把に描線を引くと言うこととは異なる意味である<sup>(5)</sup>。また節の短い描線は、長いストロークではないが、そこに伸びやかさを含んでいなくては行けない。短い描線は筆勢を感じさせることができるがそれは静的なものではないことが好ましい。

絶えず眼球が動いているために視軸が変わり、様々な見かけが見えるといったような複雑な要素を含んでいる必要がある<sup>(6)</sup>。また長短の違いのある線の両方を取り入れる際には、適切な輪郭の区切り方を意図する必要がある。例えば人体を描く際には、関節部だけでなく、その筋肉の流れに沿った長短の線の使い分け等も大切になる。そうすることで、そこには対象の中にある様々な要素を内包させることができる<sup>(7)</sup>。

四つ目は抑揚のある線である。抑揚のある線とは例えばクロッキー、スケッチ等においてある部分は細い線で繊細に描き、ある部分是对照的な強く太い線とを組み合わせ、また力強く緊張した部分や、柔らかく力の軽くなった所の違いなどを線の強弱を利用し表したものである。具体的には、人体をクロッキーする際に、強く張った背中の線は力強いシンプルな線で思い切りよく描き、腹のたるんだ形は柔らかい線を重ねるといったもので

ある<sup>(8)</sup>。また描線に抑揚を付けるための大切な要素に筆圧がある。例えば太い線を引く場合は力を加えて描くため、デリケートな形の様子がかくされてしまう。その際、徐々に手首の力を抜いたり、肩を視点に腕全体を使って描いたりすることで、なめらかに弱めの筆圧へと移行していく。そのことで力強い線であってもやわらかい感じを表出し、さらに線に表情が加わる<sup>(9)</sup>。また意図的に抑揚のない線を使うことで描線に独特な静的表情を加えることもできる。加えて線に抑揚を出す際には線の端の止め方、抜き方も考慮することでさらに良い線となる。

以上のように描線には四つの種類がある。またそのほかに、上記四つの描線の種類の中には分類できないが、描線には時間を表すものも存在する。それはクロッキーの描画の過程などにおいて、形の狂いが出て消さずにその上から描きすすめることで、重複した線、描かれた線の回数が時間を感じさせるものである。また、線を重ねながら正しい形をつかんでいくことは生き生きした線を描くことに繋がる。

以上、本節では魅力的な線の定義について検証してきた。魅力的な描線とは線の肥瘦、曲・直、長短などの強弱を利用し、それを効果的に組み合わせたものであるが、その線をより効果的に組み合わせるためには、各々の描線に適した表現との関わりが大切になってくる。

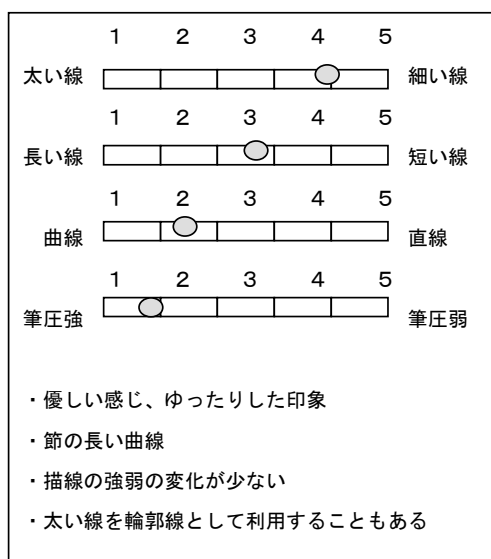
次節では魅力的な描線をより深く考察するためにクロッキーやスケッチなどに現れた描線の表現している要素と、それを構成している線の種類、またそれを有名作家の表した描線との関連性から検証していく。

## 2. 描線の種類と表現との関連

本節では魅力的な描線と表現との関連についてより詳しく検証していく。そのため、クロッキーやスケッチなどに現れた各々の表現を4つに分類し、各々の描線における肥瘦、曲・直、長短、その描線を用いた代表的な作家に触れながら考察していく。

一つ目は童画のもしくは、プリミティブな表現をもつスケッチ、クロッキーにおいての描線の特

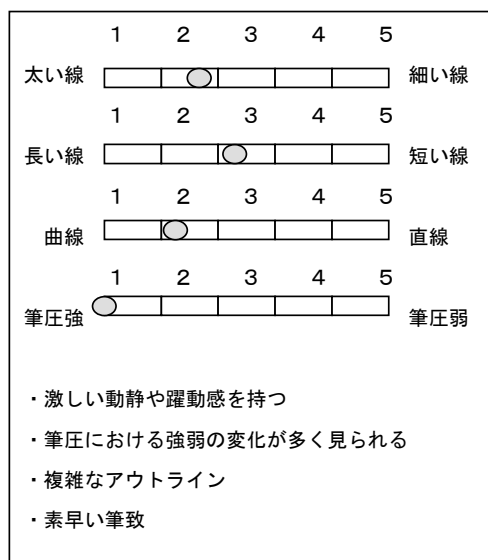
徴についてである。これらの作品の印象は素朴であり、やさしい感じや、ゆったりとした雰囲気を持っている。そこに用いられている描線にはシャープな直線や曲線が多く、またそれは節の長いものである割合が高い。しかし抑揚の少ない線が多いのも特徴的である。このような描線を用いた代表的な作家にパウル・クレー(1879-1940)が挙げられる。クレーは童画的な絵を多く描いたが、線を単なる描写の手段としてだけでなく、感情や雰囲気を表現するための抽象的な手段としても使った。また、しばしば太い輪郭線を取り入れたりすることで線描にゆったりとした印象を持たせている<sup>(10)</sup>。



(表1) 童画的・プリミティブな印象を持つ線

二つ目は激しい動勢や、一瞬、一場面の出来事が表現されているクロッキー、スケッチにおける描線についてだが、そこには様々な種類の描線の使い分けを見ることができる。描線の使い分けはアウトラインの変化を生みだし、またそれが筆圧の変化などを伴う抑揚の大きい線と組み合わせられることで、激しい動勢や躍動感を感じさせるものとなっている。加えてすばやい筆致で描かれた線が多いのも特徴である<sup>(11)</sup>。このような描線はエドガー・ドガ(1834-1917)やトゥールーズ・ロートレック(1864-1901)などのクロッキーやスケッチ

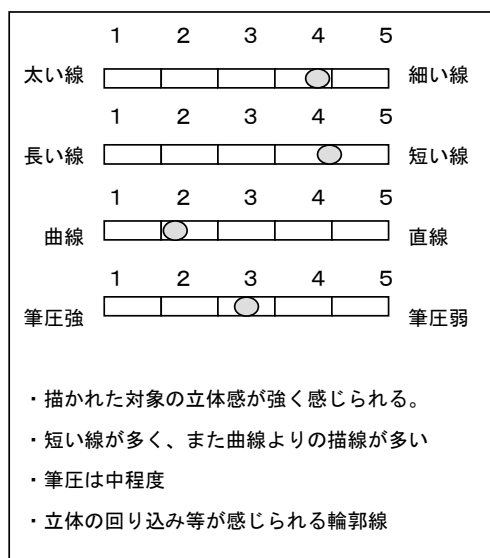
ちに顕著に表れている。彼らは数多くの素描を遺している。その描線からは複雑なアウトラインの変化が見られ「話すごとくに描いた<sup>(12)</sup>」、また「揺れ動く不安定な線が今まさに走り出す馬の勢いを表現する<sup>(13)</sup>」といわれるほどであり、そのクロッキー、スケッチには描線を引く際の素早さや、強弱を含む線の多用があったことが伺える。しかしその線には要所をゆっくり丁寧に描かれている部分があることで、スピード感を持つ線が強調されている点も見逃してはいけない点である<sup>(14)</sup>。



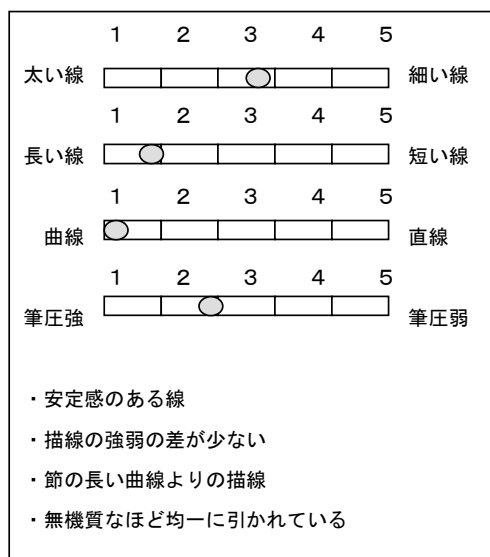
(表2) 激しい動きや、一瞬の動きの感じられる線

三つ目は対象の立体感や、生命感を強める際に用いられている描線についてである。そのような表現のされたクロッキー、スケッチにおける描線は短く、例えば人体を描いた際には、緩やかな一本の線が途中で切れずに連なっているようなことはなく、あるところで切れ、その描線はそこから別の人体の部位を形作っている。途切れ途切れに描かれた輪郭線は、その内部に統一されたひとつながりの領域性という魅力を生み出すことが出来、そのことは描かれたものの内部構造までも感じさせ、それは強い立体感、生命感の表現にもつながる。このような描線はエミール・ブルーデル(1861-1929)のクロッキー、スケッチに数多くみられる。ブルーデルはフランスの彫刻家で数多く

の肖像彫刻を作った。彫刻における生命感の表現も、この描線に起因していると思われる<sup>(15)</sup>。



(表3) 対象の立体感や生命感を強める線



(表4) 対象の形態感や存在感を強める線

四つ目は描かれた対象の形態感や存在感を強めたりするとき用いられている描線についてである。この際に用いられている描線は、主に肥瘦の差のほとんどないものや、抑揚の少ないものが多

い。このような線の持つ安定感が、フォルムや存在感を強調する。このような描線を用いた代表的な作家は藤田嗣治(1886-1968)やフェルナン・レジェ(1881-1955)である。まず藤田のクロッキーやスケッチをみると、節の長い曲線よりの描線で描かれているものがあるが、その線には抑揚がほとんどない。またその描線は細く、肥瘦の差がほとんどないのが解かる。つまりは無機質なほどに均一に引かれているが、それはフォルムを肯定することに一役買っているということが言える<sup>(16)</sup>。またレジェも同じような描線を用いており、その線により人物の持つ個性が単純化され、形態と太い線によって力強く誠実な印象を与えている。息の長い線でのびのびと描いており、太く、よどみのない簡潔明快な線で引かれた人物の輪郭は、主題を明快にしている<sup>(17)</sup>。

### 3. 描線と時間、筆跡の遅速

このほかにも、一節でも述べたように、描線には時間を表すものも存在する。作家はクロッキー・デッサンなどにおいては制作過程において何度も描き直しを繰り返す、一枚の画面はその過程においてめまぐるしくその様相を変えていく。またそのことで、重複した線、描かれた線の回数が時間を感じさせることとなる<sup>(18)</sup>。本節では、描線が表す時間の効果、またその描線の持つ特徴についてジャコメッティの用いた描線を例に検証していく。

アルベルト・ジャコメッティ(1901-1966)は、上記のような描線の重複等のみられるクロッキー、スケッチを数多く残している。「筆の圧力が絵画の表面を細かく切り刻み<sup>(19)</sup>」と形容されるようなシャープな描線が特徴的である。また曲線の多用されたその描線には、その対象全体を把握しようとする行為の緊張感が生々しく表現されており、幾重にも重ねられた描線の筆跡はその作品を描くための時間をも感じさせる。つまり、描き直しを繰り返すことによる無数に引かれた描線が時間を表しているのである<sup>(20)</sup>。

このように、対象を追求しようとして無数に描き重ねられた描線はそこに時間をも内包する。また躊躇のない、勢いよく引かれた描線からは対象

との関係をより深くつかみ取ろうとする鋭利な感覚をも感じることができる<sup>(21)</sup>。

本章においては魅力的な描線、そして描線と表現との関連性について考察してきた。次章では、クロッキー、スケッチの指導において描線の特性を生かした上で、指導上の良い線、良くない線についてあらためて定義づけを行い、その指導法と留意点についてひとつの授業実践を例に考察していく。

### Ⅲ. 魅力的な描線の表出をめざした指導法

#### 1. 魅力的ではない描線の定義

前章まで、魅力的な描線の定義や種類について参考作家の作品を加えて考察してきた。それらをあらためて振り返ってみると、魅力的な描線のタ



図1 参考クロッキー作品

イブは幅広い要素にまたがって定義づけられているのが理解できる。特に前章第2節の4つの分類からそれらは顕著に読み取ることができる。そこで、それらの要素を抽出することで、反対に抽出されなかった要素を挙げて、魅力的ではない描線のタイプを導き出してみる。

前章の2節の表1から表4にある4つの共通項目の中で、ほとんど該当していないものは、4つ目の筆圧における「筆圧の弱さ」であろう。もちろん、筆圧の弱い作品でも魅力的な作品は多々存在する。しかしその筆圧の弱さと他の項目の種類によって、魅力的ではない描線を作り出すことは可能となる。図1にある2枚のクロッキー作品は決して魅力的とは言えない描線で描かれたものである。これらの線を分析すると、線の太さはさほど特徴はないが、線の長さにおいては短いものの集積であり、それゆえに直線的な線が多く、さらに筆圧は総じて弱い。つまり、筆圧が弱く、短く直線的な描線によって作られたものが魅力的ではない描線の定義であるといえる。当然ながら、描かれた形体そのものの魅力不足も影響しているわけだが、同様の形体表現でも描線の種類が異なれば、もっと作品の魅力が出てくることは言うまでもない。

次節では本節でまとめた、魅力的ではない描線の定義から脱するための効果的な指導法について考察し、授業実践によって実証していく。

#### 2. 授業実践例

前節において、筆圧が弱く、短く直線的な描線によって作られたものを魅力的ではない描線の定義であるとした。ではそのような描線を魅力的な描線へと転換するためにはどのような指導法が考えられるであろうか。

結論から先に述べると、以下の5項目のような実践方法が有効であると考えられる。

人物クロッキーによる実践

1. これまでの技術を用いて自由に描く (7分)
2. 一枚目より時間を短縮して描く (3分)
3. 利き手ではない手を使って描く (3分)
4. 動いているモデルを描く (3分)
5. 歩き回るモデルを描く (10分)

実践1では、まずは作者の現在持っている描線のタイプを把握するために、クロッキーとしては長めの7分で実施する。実践2は、実践1の半分以下の時間である3分で実施。そのような時間差

をつけることで、素早く形を捉え、描線も素早く引くことになる。おのずと線の勢いも増し、また線の長さも変化が見られる。利き手ではない手で描写する実践3では、慣れない手による描線から醸し出されるプリミティブな線描表現に期待する。それはあたかも幼児が描く描線のように、大胆で、迷いのない素朴な線が表出されるかもしれない。しかし利き手と同様の描画材の持ち方で描くと、どうしても力が入らず、弱く細い線になることは想像できよう。実践4の動いているモデルを描くでは、実践2以上に素早く形を捉えて描線に置き換えなければならないため、長く抑揚のある描線が集積して形を生み出す可能性があると思われる。そして最後の実践5は、実践4をさらに特化して描写する方法として参考程度に実施した。実践4に関しては、ジャコメッティーが描いたドローイングのような、時間の経過とともに微妙に変化する人物の諸相を描き出すことも目的としている。実践5は動画のコマ送りのような瞬間的動きの集積を目指すものであり、それは古くは未来派の画家たちが挑んだジャンルであると言えよう。ちなみに本実践における共通の条件は下記の通りとした。

(共通条件)

- ・消しゴムは使わずに描く
- ・モデルの全身を入れて描く
- ・画面一杯に大きく入れるようにする
- ・自分なりに良い線を考えて描く

実践4の前には以下のアドバイスも実施した。

- ・「良い線」に関しての見解を告げる
- ・ジャコメッティーのクロッキーを参考資料として見せる

なお、本実践の対象者は、美術分野を専門としていない大学生28名で、学年は第4学年である。5つの実践において、簡単な感想も書いている。以下はその抜粋である。

学生の感想

#### 実践1

- ・細かいところがうまく描けない
- ・時間があるため細かいところまで描ける
- ・手が難しい、顔が難しい
- ・イスまで描けた
- ・全体的に小さくなってしまった
- ・陰影まで付けられた

#### 実践2

- ・線の思い切りが必要だと感じた
- ・全体を早くとらえる必要を感じた
- ・じっくり見ていたら時間が足りなくなった
- ・似せようと思う暇がない
- ・急いで描いた結果全体のバランスが崩れた
- ・勢いのある線が描けた

#### 実践3

- ・迷いなく描けた
- ・弱い線だが潔く描けた
- ・形はうまくとれないが一本の線で流れよく描けた
- ・思ったよりうまく描けた、利き手よりもよい気がする
- ・コントロールはできなかったが、まとまった気がした
- ・右手よりも形がとりやすい
- ・まっすぐに線を引けずぐにゃくにゃした線になった
- ・自分の望む方向に線が引けなかった
- ・力のない薄い線になった
- ・細かい場所の描き込みがうまくできない
- ・線の強弱が付けにくい、安定した線が引きにくい
- ・長い線があらぬ方向に行き、短めの線になることが多かった

#### 実践4

- ・これまでよりも力強い線になった
- ・自由に描けて楽しかった
- ・見た瞬間を描いている感じになった
- ・思い切って身体の動きをとらえられた
- ・形がはっきりした、線を長めに引いた方が描

きやすかった

- ・線をどんどん引くことをためらわずにできた
- ・だんだんと形が出てくるところが面白い
- ・新鮮だった、動いている絵を描くという発想がなかった
- ・一筆描きのようになり、描くスピードが速くなった
- ・どの瞬間を描こうか悩んだ
- ・動いていて全体像の流がつかめなかった
- ・モデルが動いていると難しい

- ・構図は概ねうまくいっていた
- ・枚数が進むに連れて筆圧が強くなっているようであった
- ・ためらいがなくなっても、手の使い方がまだ固い学生が多かった
- ・実践3～5は迷いなく描いていた

#### 実践5

- ・他のものより素早く描けた
- ・線が一番力強くなった
- ・一番生き生きした表現になった
- ・最初はなかなか描けなかったが、描いているうちに思い切り描けるようになった
- ・一番自由に鉛筆が動かせる楽しかった
- ・上手に描こうとしない分思い切り描けた
- ・少し想像で補ったりした
- ・一つ一つの動きを瞬間的にとらえる面白さが感じられた
- ・全て同じ形になった
- ・何処を強く描くのか、太く描くのか分からなかった
- ・とても描きにくかった
- ・早さの必要性を感じた
- ・手をもっと早く動けばいいと思った

当初の予想通り、実践3においてはうまくいったと思う学生と、うまくいかなかったと思う学生とが二分されていた。実践4、5ではうまく描けた、面白かったなど、かなり手ごたえを感じた意見を書いている学生が多かったのが興味深い。またここで、指導者側から見た学生の様子についても下記に挙げてみる。

- ・消しゴムが使えないことに関しての抵抗感が感じられた
- ・形に対するこだわりの強い学生が多かった
- ・似せることを大切にしていた
- ・手元を見る時間の方が長いようであった



A 実践1



A 実践2



A 実践3



A 実践4



B 実践1



A 実践5



B 実践2



B 実践3

図2 学生Aによるクロッキー

ここで学生A、B、二人のクロッキーの写真を例に確認してみると、実践1では短く、自信のない線が描かれていたのが、回数を重ねるたびに長く、力強い線になっているのが読み取れる。特に実践4、5においては当初の作品とは別人かのような変化を生んでいるのが興味深い。短時間の描写が醸し出す線の潔さが、のびのびとした画風へと転換している様子をはっきりと描かれており、それはまた、形を捉えることに対する気持ちの解放の表れであるとも言えよう。

また、参考作品の提示を筆頭とした、魅力的な描写に対して理解することで、自身の作品も大きな変化をおこすきっかけとなるのが結果として表れている。実践4の前に提示したジャコメッティの作品には衝撃を受け、その後の2作品の制作時の描画速度は確実に上がっていた。





B 実践4



B 実践5

図3 学生Bによるクロッキー

#### IV. おわりに

本研究では絵画の描線が果たす役割を検証した上で、魅力的な描線の描画法についてひとつの実践を基に考察してきた。絵画の中の線のみを抽出して、それに関して論述することはいささか乱暴なことであるとも言える。絵画における描線と表裏一体である形体を挙げずしてこの論を進めたことに対して異論が出るのも理解できる。しかしながら、より複雑で難解な形体的要素を扱う前に、比較的安易な描線について考察し、理解することで、クロッキー・スケッチ表現に対して苦手意識を持つことなく取りかかることが可能となると確信する。今後さらに研究を深めることで、多くの描画パターンに対応できる指導法を構築できると思う。

#### 注および引用文献

- (1) 発行者/藤根井和夫、「現代日本画家素描集 ⑥」加山又造、日本放送出版協会、扉文参照
- (2) 発行者/藤根井和夫、「現代日本画家素描集 ⑥」加山又造、日本放送出版協会、扉文
- (3) 著者/安徳瑛「筆でデッサンする」、株式会社美術出版社、参照
- (4) ラファエル・エレンダー/著「デッサン基礎」、株式会社ダヴィッド社、p. 67参照
- (5) 発行者/角川歴彦「美と創作シリーズ 造形の基礎を学ぶ 一本の線から広がるデッサンの世界」、株式会社 角川書店、p. 172参照
- (6) 同上
- (7) ラファエル・エレンダー、前掲書、pp. 58-62参照
- (8) 著者/視覚デザイン研究所・編集室「裸婦とクロッキー」、株式会社視覚デザイン研究所、参照
- (9) 著者/早坂優子「デッサン上達法～かたちのトレーニング～」、株式会社視覚デザイン研究所、p. 32参照
- (10) 監修/中山公男「週刊グレートアーティスト」第21号、株式会社同朋舎、参照
- (11) 著者/柴崎春通ほか/「絵画技法体系 第2巻 デッサンI」、株式会社三麗社、p. 27参照
- (12) 著者/宗左近「新潮美術文庫 3 1 ロートレック」、株式会社新潮社、p. 79
- (13) 早坂、前掲書、p. 50
- (14) 早坂、前掲書、pp. 48-51参照
- (15) 監修者/土方定一「ブルーデル 素描の魅惑への案内」、株式会社求龍堂 前書参照
- (16) 著者/岡本謙次郎「日本近代絵画全集 第7巻 藤田嗣治」、株式会社講談社、p. 52参照
- (17) 早坂、前掲書、p. 51参照
- (18) 監修/谷川渥「絵画の教科書」、日本文教出版株式会社、p. 348参照
- (19) 谷川、前掲書、p. 255
- (20) 著者/柴崎春通「絵画技法体系 第2巻 デッサンI」株式会社三麗社、p. 12参照
- (21) 谷川、前掲書、p. 255参照